



不思議な女達

美知代

世間には兎角不思議な女男が

澤山ある、差當り××さんの夫婦が解らぬ。主人と云ふのは何でも中学校の教師で、月給五十五圓とか、そんな話である。だが實際夫婦に子供も三人も養つた上に、おまけに細君の父親と妹二人、都合三人の厄介者まで引合つた日には、どうして立ち行く筈が無い。それこそ内々四苦八苦の、細君なんぞ、たまに餘仙物の一反も自身に引かけられ、ば頂上位置のだらうのに、××さんではさうでない。細君や妹達の身装は素晴らしいので、わけても美しい細君は、折々の流行を逐ふて、とつかへ引かへ綺麗を飾つて、毎日のやうに俥で出歩いた。

そんなら恒産でもあるの

それは××さんの直ぐ隣りに住つた日本畫家の細君で、その頃内弟子との關係がはれて、離別されたのがあつた。そして細君は姦夫と一緒に、何處か高田あたりへ閑居してあるやに聞いてゐた。其處へ××さんの人外さんが同居してゐると云ふ——何れは人外さんの事だから戸氣相求むる仲間を離つての事であらうか、とまあ、誰しも考へる。

だが全くと畫家の細君と、一人の男を取り合つて、互に競争してゐるのだから堪らない、日本畫家のと、××さんのと、二人は以前隣り同士に住つてゐた頃から、情を知つて、仲よく一人の姦夫をもやひ持ちに楽しんでゐた。それが急に對手の一人が男と同棲する事になつたので、良人を捨て、三人の子供を捨て、一途に愛するもの、遠へ走つたのである。

出入りの御用聞きなど

茶化したやうに、こんな事を噂手口で體舌くつニコニコ 第五十二號

だらうか、さうした事は誰しも直ぐに考へる、併し主人は腕一本でやつて行く人なのである。

一體あの奥さんは何處へ行くのだらう、何時もく子供をうつちやつて、自分二人で俥に乗て——

だが不思議はそればかりでない、ついぞ一度夫婦一緒に、二人連れで出掛ける處を見た例もない私達は、變な噂を耳にする。

「××さんの奥さん位、變な俥の乗り方をする方は珍らしい。何處へ行くものだから、ついぞ一度行く先きまでずつと乗りつけた例がないさうだ、何時でも途中でせいで下りちやつて、それづきり姿を隠しちやつてね」

車夫の話ださうで、誰か本統か、兎に角普通ぢやない。

た。妻君がなくなつた後、××さんの家で、妹達の華やかな笑い聲に交つて、御隠居の愛犬ジョンまでが賑やかに吠え立てた。

併し美しい女、寛大なのは男の本性かも知れない、日本畫家は不義故に離別した細君の手當として、高田の閑居へ月々若干かの金を送る約束をした、が聞いた。

畫家と云へば新進青年洋畫家の細君に面白いのがある。

面長の抜ける程白顔に

ぽつと櫻色に頬紅をさし、すつかり洋風に化粧を施した上、天然か、故意か、アイノコ式に金髪とも見える前髪をハイカラに、今の流行の中央から分けた青箱まげに結んだ處は、松井須磨子のノラか、ヘダ。ガブラーか、兎に角餘程の近代的女に見える。

そして又自分でも新しき女を

以て仕じてゐるのである。

「私此間ある雑誌へね、新しくしき女と家庭

不思議な女達

變な話だが、此間傳がある處を

うろついてゐたと思ひ玉へ、何の氣なしに出て来た女の顔を見て驚ろいたねえ、だつて君、隣家の細君なんだもの。

××さんの一軒置いた隣家に住つた文學者が宅へ来てこんな事を話して行つた事もある。

男にだつて了解出来ない××さんの氣持が、無論女の私に解らう譯がないから、それはそれとして置いて、實に解らないとも、憤慨に堪へないとも、云はうやうのなのはその細君の氣持ちである。全く人外としか考へ切れない。

その人外が急に何處かへ行つて、老松町では久しくその美しい姿を見る事が出来なくなつた

と又妙な噂さが傳はつた

つてのを書きましたの、そしたらね、それを見て来たのでせうよ、又昨日他の雑誌社から、私の話を聞き度いつてねえ、ノートを持って記者が來ましたわ」

よく斯うした話を得意氣に聞かされた。だが此女は青鞥社同人で、何でもない、勿論小説家でもなければ、詩人でもない、手藝に堪能で、よく斯うした方面の記事が、その人の名前の方々の雑誌に載せられてゐる位、家の事は何かひこまめに片づいて、所謂新らしき女の家庭らしくない程、其處へらの整理が綺麗に出来た。三つになる女の子と生れたばかりの男の子、二人の子供を抱へて、家事をした上に、手藝の講義を書いて、そのおまけに日頃持論をまで、折々の筆のすさびに、さうした雑誌へ送る——僅かな布を利用して作つたのだといふ手縫ひの小兒服などを着せた、可愛、容子の女の子を見てみると、私は全く羨しくなる。

「い、えね、私だつて家の事なんかしたかないわ、だけどもね、良人が描かきでせう、其處へ持つて来て、私がこんな商賣と來てるから餘

「家を取崩して、子供に襦袢を下げさせて置いたのや看板と違つて、大變ですもの、仕方なしたわ」

斯う淋しく笑ふのが常であつた

ある晩の事、それは恰度下の男の子を産んで産後一月ばかりの間もない頃の事である。一寸とした用談を持つて、宅へ話しに來た細君は、どうした話の調子からか、泣きながら悲しい身の上話を初めた。

「私の母なんか随分七轉びり八起きもした人で、行李一つになつて、父には病氣される、敬々苦勞ばかりするにはしましたけれど、まだ自分でおしめなんか洗つた事はないでせう、それなのに私を御覽なさい、まだこれから歸つて、すつかり明日の朝の仕度をした上に、この子のおしめを洗つて置かなくちや、本統に嫌になつてしまひますわ」

味氣なと云つた表情があり、と面をさらはれる。細君は深く吐息をさへ洩らした。「一生斯うしておしめ洗ひか」

「人々の思わぬ氣になつたものらしい、」
「だけども矢張り駄目ですね、一旦夫婦の間がそんな風になつちやうと昔のやうな純氣持はなくなつてしまひます。私もねえ、眞人であるまゝ襦袢を取つて、是非元々通りになつて呉れつて云ふのですから、堪忍はしたもので、あま何故あの時生家へ歸つたまゝでもなかつたらうかと、」

自分で自分が腹立しい

やうな氣持ちにもなりませんの
だつてね、皆な子供が可愛いはつかりのせい
ですわ」

痛憤の極子供を抱いて生家へ

歸ると、さうでなくては、元來此結婚には反對では非今一度襦袢を我手に取戻したいが一杯の兩親は怒り、怒つて、畫家の親里へ歸護士を差向けた。
その結果、箱を返へさう、子供を引取らうと云ふ立場にまで立至つた。

「皆な同じだわ」と慰めやうとして私が云ふと「だつて私ののは違ひますもの、戀で結婚して、戀を命の女の顔へ、散々溝泥を塗つたらうれて、もう私生きている甲斐もない位よ、本統に腹が立つてねえ」
如何にも口惜し氣に、やがて疝立つた聲で話した。

最初畫家と結婚するに就いても

物堅い兩親から絶対に反對されて、期當までされたのを、その後子供が産れるやうになつた頃、親子の情愛で、やつと往來を許され、父親が婦人科のお醫者なるのを幸ひに、初めの女の親が其處で産んだのである。だが其後良人の畫家が青鞵社の一人だと云ふ新らしき女と新たに戀してそれを細君の前へは友達だと觸れ込んで自家へ連れて來た。そんな事とも知らない妻君は眞面目に仲よく、時には嫌な事があつても、忍んで調子を合せ、暫らく一緒に同棲した。「あなた今日は肉にしませうか、私そんなお魚なんか食べたかないもの」

奥さん、お子様のお魚を

「するともう私、悲しくなつて、愈々あしたの晩、姑の方から受取の人が來るといふ段になつて堪りませんの、じつとね、子供の顔を見てあると可哀相で、自然に涙がぼたり／＼落ちますの、それに、父、病院の看護婦までが、お思ひなさるなら、どうと片親になんぞなさいますなよ、私は親母の手に育つて、染々苦勞をいたしましたから、」つて、さう云つて呉れるのでせう、私一晩泣いて考へましたわ、恰度其處へ眞人から變名で親達の氣のつかないやうに手紙を呉れたでせう、否ね、矢張りね、子供の事を思ひ出して堪りないんですつて、是非歸つて呉れつて書いてあるのよ、私まるでもう前後の考へもなくなつちやつて、セルのねえ、腰まきを着たまし、そつと子供を抱いて生家へ逃げ出したきり、新橋行きへ乗り込んでしまひましたの、ですから今更どの面下けて生家へも歸れず、父も今更どの面下けて、私のしぐさに呆れてお金につまるといつては、生家の母から呼金も出來、さう／＼不自由な思ひもしなかつたが持つてゐた着物も段々なくなる一方で、物質の

こんな調子でその女は

ずん／＼畫家から金を貰つて、勝手に家政を切り廻しをした。だが細君はまだ氣がつかないで心安立ての氣安さからだとばかり思ひ込んでゐたと云ふ。
「でもね私、何だか戀だと氣がつきましたわ、幾らのろまでも、餘りな眞似をされ、ば氣がつくわ」

私は去年の春頃、初めて湯で

「私本統に逆性で困りますのよ、御覽なさい髪を切つてしまひましたの」
「あらまあ、お惜しい事をなすつてね」
上から精神の上からも、妻君は不満な思ひをしつめた。
「あ、一、一生おしめ洗ひをさせて貰ひませうか」
その後二三日置いて私が行くと、水に濡れた手を拭きながら出て來た細君は、私の顔を見るなり淋しげには／＼おんんだ。
「好いわ私、痛快で堪らないわ、今にね、別居してしまふから、來年の四月頃まで黙つて氣にも見せないで置きますの、そして内々支度をした上で、パイと突然に別れませうつて云ひますわ、人の氣も知らないでゐるかと思ふと痛快で痛快で堪りませんわ」

細君の考てゐるのは何でも

二三の同志と一緒に、西洋洗濯屋か何かを初める積りらしい、何かの話の序に、ふと我が家の者へその話をする、家の者は一口に斷定して了つた。
「なあに、あの方はヒステリーだ」
ヒステリーか新らしい女か、知らず私は、古く新らしく、新らしく古い氣持の入り混れた現代の女の一人として、この細君には心からの同情を持つ事も出来るのである。(をばり)